

藝術学関連学会連合

第 11 回公開シンポジウム

語りの変遷—作られる白虎隊イメージ—

川延安直（福島県立博物館）

本シンポジウムでは、白虎隊自刃図の変遷に見られる白虎隊イメージを通してニュースが次第に語りとして変容・定着していく過程を報告した。

戊辰戦争直後の明治時代初頭から現代までたびたび描かれた「白虎隊自刃図」は、その目的が鎮魂から顕彰へ変容し、戦前の理想化を経て、戦後多面的な展開を見せる。その発端となった白虎隊自刃のニュースをいち早く伝えたのが『天理可楽怖』である。

しかし、ニュースソースは飯沼貞吉の証言も含め伝聞として伝えられているのであって、白虎隊自刃の真相について新たな資料が発見されない限り調査を進める術がない。そのため、白虎隊自刃図制作に使える情報は飯沼貞吉証言、『天理可楽怖』の記述に頼ることになる。燃える（そのように見える）城を遠望し、会津は敗れたと思いこむ隊士。そして自決の決断、互いに刺し違えての自刃。こうした要素が白虎隊自刃図を構成する。

現在のところ詳細な白虎隊自刃の真実は確かめようがない。それでも白虎隊自刃図を研究する意義があるとすれば、白虎隊自刃図が描かれた時代の人々が持つ白虎隊イメージを検証し人々がそこに託し見ようとしたものを考えることにある。真相を伝える歴史史料としての価値は少ないとしても、白虎隊自刃という出来事（ニュース）が「語り」として定形化、流布していく過程を見る事が出来る。

自刃図中最初期の作品である穂積朝春筆「白虎隊自刃図」（会津若松市蔵、会津武家屋敷蔵）では切腹の描写に注目した。同図に多く描かれる内臓露出の描写は意図的に描かれたと思われる。同図の制作動機には、鎮魂・慰霊に加えて、反発・抵抗の意志の表明としての切腹に近い観念があり、怨念・反抗・正義の表明が託されているとは考えられないだろうか。渡辺文三郎原画石版画「白虎隊自刃図」（以下、石版画「自刃図」）（個人蔵・福島県立博物館寄託）は白虎隊の「語り」を形成した重要な作品である。大量制作が可能な石版画は、白虎隊イメージの流布に大きな影響力を持ち、ニュースを再生産したとも言える。

実際は洋装であった隊士が和装に描かれ銃が目立たない。切腹の場面は描かれているが凄惨さが抑制されている。飯盛山から炎上する城下を俯瞰する。以後、白虎隊自刃図はこの要素を踏襲する。現在に続く白虎隊イメージの原点をこの作品に見ることができる。

陰影による立体感がもたらす画面の現実感、これが真実のニュースと錯覚させたのではないだろうか。同図の企画・発行主体は会津出身者であった。同図に描かれているのは、会津出身者から発信された、彼らが広めたい白虎隊イメージであったと考えられるのだ。

近年、旧会津藩士の日本画家野出蕉雨、渡辺東郊の「白虎隊自刃図」が発見された。野出蕉雨作品（白虎隊記念館蔵）には石版画「自刃図」に記されている説明文が書き写され、同図に拠ったことが明記されている。この作品が確認されたことで、旧会津藩士の間でも和装の白虎隊士が容認されていたことが知られる。

大正 8 年制作の渡辺東郊作品（会津若松市・個人蔵）は、戊辰戦争時の藩主松平容保の侍医であった馬嶋瑞園・戊辰戦争当時白虎隊に属していた海軍大将出羽重遠、『飯盛山白虎隊列伝』を著した佐瀬三余らが賛を寄せる。東郊自身も戊辰戦争時主力とされた朱雀隊に属した。本図の賛者は戊辰戦争の実相を知る会津藩の知識人、有力者であるが、彼らは和装の白虎隊を公式のイメージとし、自刃の凄惨さを語る事をしなかった。

会津藩の滅亡に殉じた白虎隊はその後、「会津藩」が「近代日本」に、反発・抗議の意志が忠君愛国にずらされ転用され国威発揚に利用されていく。その経過はまた視点をあらためて論じる課題である。